

重修真書太閤記

八編五

晴

家傳

和書門	三四五	二六三	一三六	四〇
類	號	函	架	冊

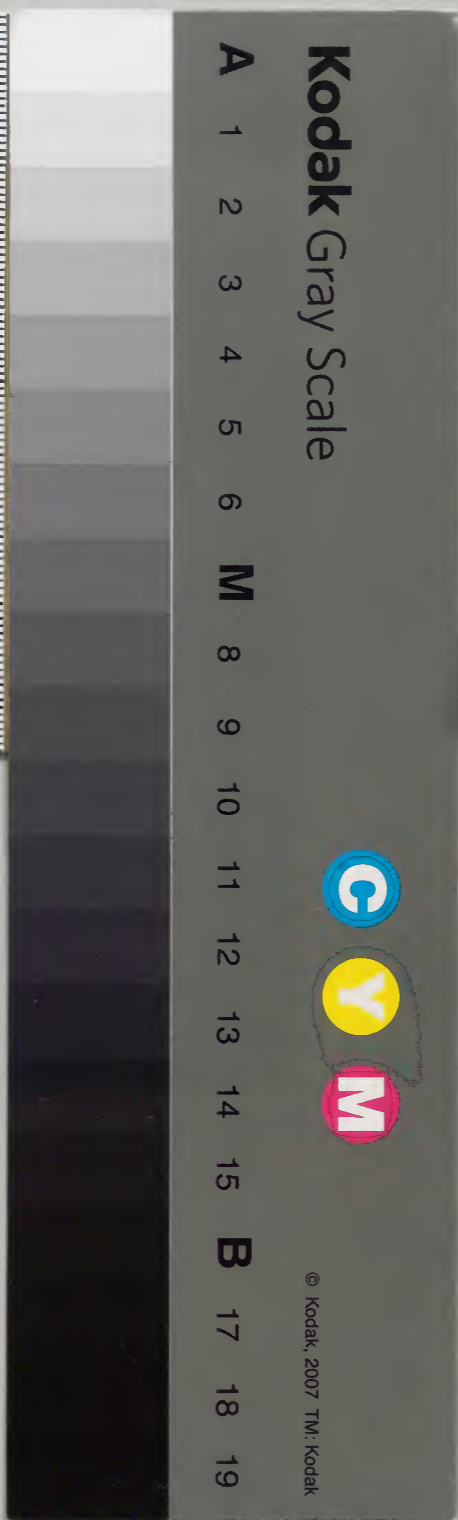
內閣文庫	三四五	四〇	一七
和書	號	冊	函
類	號	冊	架

第七

內閣文庫	番號	和	34053
	冊數	40	(5)
	函號	171	45

新刊本

共四冊



重修真書太閤記八編卷之十三

柴田瀧川内謀を定むる事

并不破原前田金森上京の事

天正十年の秋も過ぎぬや半ありける小羽柴

筑前守ハ主君の御葬式万事とのハ京都の所置

御所々の御用残る所あく勤め半日の暇もあく

明一暮一あひらる小北畠信雄尾州清洲小住く

百万石神戸信孝濃州岐阜中住して五十餘万石瀧

川左近将監ハ勢州赤名長島龜山を領し三十餘万

石柴田修理進勝家ハ越前北庄小住し百餘万石の

主とるハそもく是誰人ガ與ヘ一すべく右大臣殿
の御恩ありずや然るハ筑前守の功をぬと一と思
ふ所あり君父の御遺骸を安措一奉るを一も忘
却一唯筑前守を失あそぐやと肺肝をくごさけ
るハ何ぞぞや蓋瀧川左近将監ガ隠謀有りて柴田
と羽柴と相戦一り其弊ハ衆て己ガ欲を逞よ一
くせんとおりふより柴田ガ智愚淺く驕勇あるを
見くその機とをありその秘を發一つるを悟り
ずつひハ身を風るハ一國をう一あふハ至ること
慨嘆ハあり有り都ハ羽柴筑前守沈香を以
て総見院殿大雲院殿の御像を造り奉り御送葬の

儀式をと一のへあハ洛中洛外の浪人ハ云ハ及
びハ百姓町人よぐゆそれハ十日の糧を賜ハリ
て心々ハ念仏題目あどを修行一つる振鈴のこゑ
木魚のひハ四方ハ満々とり心まよハのあぐゆ
鬼の如く荒ハれハ一右大臣どのハ筑前守の
作善ハより今ハハハありあふらんと思ぬ人
もあかりハ是を傳一聞者の中ハ筑前守悪一
と思ふハのあとハ無ハへさそれハ瀧川ガ許ハ
行ハ筑前守ハ万事を一人一取行ハハハ信
雄信孝の両公達さハ柴田とのさあハ此方ハ
こへ御相談をとげぬと云とヤハるる追従

志づるをばゆゆと思ふも眉睫を見得ぬ人心まれ
 や一益よき便宜を得しと思ひつれハそれらを北
 庄ゆつあそりく柴田のりこへ音信しハ柴田そ
 れらと叫入れ都の事のめづりしハ何ぞやあり
 つると問へハ元より柴田が意を取んと思ふ浪人
 あり有つるそハ枝葉をそへ鬼も有りさ角も有り
 一と筑前守の都のとりあしを語りてハ宿老の柴
 田どのハ何とて左サリハ打こめられかおをせ
 一やあど輕薄の舌を動かしてそをのうせし加
 バ勝家いよく怒り速ハ軍兵を催やうさうちの
 らんとひりめく由を瀧川まきくこハ早まれり今

うち立ち何事かあるべき北國ハ雪深し十月末よ
 り歩人どふ行さあサむりのを甲曹しく弓矢を取
 ハ凍へくしてむあしく死んこれハ誰ハ説せん
 と思案しはるハ他人を以て云べさハ非ず自りり
 往でハ叶をドと既ハ旅行の支度せしハ忽ち風邪
 の意しつかくくのびくハあすをうハ勝家必定り
 ちとちあん去らハ家老を使とせん鶉殿名とく呼
 れしハ何事ハと鶉殿齋宮瀧川が前ハ畏まる
 瀧川枕をけりいハ齋宮一益ハ加をりハ越前
 ハ罷越柴田殿ハ對面し一益自身まかりしハ入
 んと存しつるハ折やハ風邪ハ頭いとみ枕ハ頓ハ

上らぬハ日數を過して詮ハ急ぎせと某小
 一舎り一大事御近習拂ふ聞名せといも
 柴田も心得て只一人身小差寄らん其時斯く
 かくあふれとことを分つ具小告れハ齋宮ハ心
 得その座より直小出立美濃國石津安八大野の郡
 を經て越前國今立郡小入ハ乙女松山の宿を過る
 ころ鯖江より使をもせ龍川名代小鶴殿齋宮
 が参りしよをいもせつれハ柴田方小警衛
 て道の左右のりり沙ハ掃除せし志るかやさて
 北左小著一かハ旅宿を點し馳走し其後勝家對
 面ハ勝家齋宮小向ハ瀧川殿ハ御風氣とや如何

る体ク心りてあし委し談りさかせよかると云
 へハ齋宮ハ進みより風氣ハさあぐのとふハ
 十餘日を過しあハ忽ちかこり中べし但し一益
 直小此方へ参向し御面話中さで叶をぬ用事日數
 かくれて詮あり齋宮を以り述る一大事小志を
 御近習遠ざけられと中志ハ勝家左右を加
 へりみく用事られハ呼出さんいつれ中何あとな
 罷立といハ近習の侍と中三間四間へとて退
 出す齋宮近々と這ひより羽柴殿の氣隨の舉動
 風聞ありめと存せし誠小はとたかふ承なる
 二葉ゆり剪ざれハ斧を用也とトあり其氣隨の

募りあは遂小若君の御為ありこれに制する者
 柴田殿あり誰々有べき早々軍を起しあふべ
 く瀧川もど御跡小つきて上洛せんさし此節
 北國のありひ雪深くし路りし此雪どけて路
 のひらくを待せあふべしその間小筑前守へ御使
 節りり何氣あ小体ゆりあへさしりハ筑
 前油断仕りゆうちゆ矢をたご玉を鑄させ用意十
 分ハゆとさ俄小切く出ゆをい加小筑前猛烈に
 共狼狽さハ加ぐ有るべからず老からハ軍ハ勝利
 とありゆもん能々御勘考りるべくゆと詞すし志
 く言上しハ勝家母く點頭て實ゆく尤々と

同心一齋宮をりつく勞らひ答礼の使者を進すべ
 せれども却く謀や洩れんずらん態とその儀ハ及
 ばぬよ一齋宮ころろ給ゆへと返答一齋宮ハ
 ハ三尺二寸兼高ガ新鑄ハ三國黒といふ越前立の
 早馬の八寸ゆりまるハ見鞍置てぞ引とりり此
 とさ筑前守より瀧川柴田兩人のりへ六七人忍
 びを入る置とりしハ雪ハ降り路次ハ何しとハ間
 道をたると越前へ使者を立るハ何とと不審しそ
 れハ同隸の忍びど由爰あしこへ馳ちり傳へし志
 何と小越前の國ハ入りこみし忍びど由齋宮ガ著
 より一日二日前ハ早知りてさあふハ探りしハ

勝家方の饗應より北庄の城中のりくありす
べく子細ゆき正一筑前守へ注進せし加ハ筑前
守その忍び共へ厚く褒美を出しり瀧川も柴田
もあゝるべしとい夢ゆも知らず計り得たりと思
ひし口惜かりり次第あり勝家齋宮が口状を
よしく思按しよとゆ然あり誰り使ふよかりんと
考へ見るゆ玄蕃りりしれその上ゆ氣みどかく
て事を破らんこれハ前田又左衛門金森入道不破
彦三原喜次郎ゆ増りのあしと思ひ定り小島若狭
守中村與左衛門を使者としてこの四人を呼よせ
勝家對面し大息つひで申さるハ筑前守が我よく

小方事を執行ふある若君の御さめ未終ゆよかり
しと存しゆこれを糾明せばやと思ひ立し只今
事を起し若君の御為却て災を引出すべし因
る筑前と和平を結むんと存立し前田殿ハ筑前
と舊好り金森ゆゆ久し御馴洩あり不破原
の御二人ハ勝家無二の方ゆあり勝家ハ心腹を能
く筑前ハ御通ト下されゆへと云ひしハ利家ゆ
金森ゆこの義一段の御事ゆゆ早々上洛仕りんと
答へしゆハ勝家大悦び和平の印とて越前綿干
把塩點粕漬二桶を筑前守へ贈るべしとて四人ゆ
渡す四人しれを請取る十月廿八日北庄を進發し

江州長濱小至り柴田伊賀守が許し立より勝家と
 筑前守と和平の使として寒天の旅行するを
 告し小勝豊折節所勞し枕重く臥あがり此事を
 言し四人の對面をみるべしれども病中るれ許
 しぬ但親おして勝家あど左サハハ菴つらん梢
 をつごふ猿よりあは逸せず筑前あり爰りて小
 さへ筑前が名仕ふ忍びのりの五人七人の常あり
 り北庄ふもあど忍びを入置ざらん淺くも思ひ
 しが親やと片息あがりかどりり四人ハ此事
 をこく彌筑前守が手の届きしを恐ろしくさく
 ハ我等が此度の参向も筑前定めて知つらんをれ

とも今ハいかせんと長濱より舟のり湖水の
 棹さし大津の上り関の清水を手お結び逢坂山を
 かせこそえく柳ハ緑花ハ紅都の春を餘所あ大
 宅小野勸修寺ゆさゆけハ伏見の里ハ伏さけの雪
 をまうひひ十一月二日といかハ山城の乙訓郡山
 崎の宝寺へ到着しかくと案内あり老クハ富田左
 近將監待うけし旅の勞をあくさりく馬の四足さ
 へ心をそへ末ダすふまで行こくりるるる
 これも忍びのりさあらぬ
 勝家秀吉へ和平を望む事
 并秀吉返答遠慮の事

羽柴筑前守秀吉ハ右近衛少将ニ任テ京都ノ守護
小心を盡シ禁内ノ御用諸公家ノ安堵百工町人ノ
所置すべく加田所へ手ノ届く如くありし加
上下ノ思ひつくとも赤子ノ慈母を慕ふ小似たり但
故右大臣家一身ノ梟雄をこのみ本能寺ノ淺間を
御旅宿小く豫且ノ咎小かりせめふ前車ノ覆
轍後車何を戒めざらんや然しるがら洛中ノ城郭
を構へんとい恐れ何れ何處然るべかりんと云
小山崎ノ宝寺小去るところ有べかりずとも宝
寺を城郭とあり處々小堀を掘り堀逆茂木を引
筑前守移使りりる處へ柴田勝家ノ使として前

田又左衛門金森入道不破彦三原喜次郎四人入来
せしよ富田左近将監より中出しか筑前守加
りくと打りひあ柴田より使節とよあこれへ
請りせとく何氣も小体く對面小及むれはる
前田又左衛門ハあひりり筑前守と入魂あれハ
久しく逢ふと由懇意の中より書院へ通り時節の
埃抄と終り金森入道不破原々口誼終るを待つケ
て利家膝をすし免さすり故殿御事りり後
諸將心々小引分れまちしゆのそ成行んとすそれ
とりふ由筑前殿ハ中國ノ探題職小く播磨小在国
ありま柴田ハ北陸道七ヶ國ノ管領とす越前

國小りれハ其際數十里をへどつ是をのづかり流
言中行あむれ不思議のそをりす族も出来れども
勝家能々思案するハ筑前守殿の心中故殿の御志
を續せあふそを主とてあハ枝葉の言をりつこ
これを疑ひりべさおりらず勝家今ハ老とて故殿
の仰せをうりて北陸道をいあふりて切り平け
いべりその餘のそゆ於て筑前殿と相撲べきこと
あつこ此上ハ若君の御を勿論万事ハ筑前守殿
由勝家を今までのいぶせく思召つらんるれどもす
へく和平の儀を主とて昔の如く水魚の思ひを
あつあふりハ頼みとてよつる昔を落おくりせ

と勝家あつこ懇小りて我々四人ハ心お由勝家
さらハ偽りハ非と存ハ筑前守殿とより勝
家と遺恨あるべさつあつ勝家が氣質ハ知らせ
あふ如く骨あふ田舎人の我あつりのあり一旦ハ
筑前殿の大功を嫉し悪しと思ひつれハ清洲あつ
由無礼をりりて我等を呼むかへ一向ハこのそ
てりこ中およりて我等を呼むかへ一向ハこのそ
入るいと勿々りつこ謀計ハおのりこ中おより
筑前守こハ思ひおよりぬそを承るりの加あ秀吉
勝家の推挙おより故殿ハ新参し勝家の武者おり
をよひ度々戦場おり首尾を合せハ加ハ物主ハ

あされし時小勝家の一字をうけく羽柴と名乗
 あり何とく勝家小對し疎意あるべさや然る小
 只今和平の義を越めふと近ごろ迷惑の至と存
 併みたり夫ハ秀吉ゲテ條あり御使とテ勝家の
 口状とテ秀吉が身小取く分小過とる眉目小ハ秀
 吉不和の意を存せざれとハ年来久しきとハ今
 ありとハ和平あんどハべさ筋小あくハ幾重小
 由勝家の助言小より万事を執行ハ可ヤハ若君の
 とい元よりのとハ御為小ありぬとい勝家まで
 由あり面々の御意見小由預リヤとくハ所詮若君
 を申く御生長ハく我々を故殿の如く御引廻し

あるやう小ありあひらせ度までカ寸志小ハ何
 とく傍輩同志あくいさかひを起しハべせんや宜
 志くこの音を以てハと云へハ利家以下四人
 の者ども一同ハ筑前守ハ摠し心ハあかくてハ
 我々使小立し功由立りと悦びて即勝家ヲ贈りし
 品々を披露しハれハ秀吉大ハ小ありこび柴田殿
 ハ昔より如是心の方小ハあり腹さく者さ
 時ハ鬼の如く腹の平ある時ハ仏ありと人由ハ
 小我も知る實ありたり御使小立れし面々由
 ありと御坐おせし一献参らせ人と云より早く盃を
 出し肴加ずく引出す四人をりくあしす種々の

前田又左衛門尉人々小向ひ何さま怪しと思ひ
 つる我々山崎へ著さるさま小夫々々旅宿を點
 一く有つるをバ極めず不思議と疑ひしをさる
 忍びり注進せしとかほへたりさも有んふ北左
 瀧川が使を立し由定め筑前知事よりありん
 を知バ十を知り丸人ありぬ筑前守末代又と
 るよりさ弓箭取か左ハ思さずやとりハ金森
 入道とむをつぎ何れゆりハ武運ハ叶ひハ大將
 あり一定天下を切者づり太平ハ致されんと遠加
 らしとかほへしと首を傾ふけり語るをさハ伊賀
 守胸ふせさくる息を休め某もあしり左なりハ思

ひいへハ山崎のサリすを知をやと人をつかり
 てゆハ一人由帰り参らぬハより能々是を尋れハ
 伏見の里の六地藏ハとられくハとやせハ不思
 ぎのとハゆと語り終れハ驛馬よりいざせぬ
 と催ふされ四人の使節ハ立かへる勝家かくとこ
 くより由謀り得たりと喜ひり四人の衆をさる
 と饗應しりハ太刀馬の數をつくり引れハ四
 人ハ喜びかのれく居城へ急ぎ立かへる瀧川ハ
 由この由告サリけるハ左近將監眉をひそめ左様
 ハ手をやぐ秀吉ハ承知せしこそ怪しれさてハ
 此方の謀ハつけ筑前かへり謀と見えたりハ

ろしく油断からりと一益ハかひく甲賀の忍の術
習ひかほへりのあれハ我腹心の郎等を山崎さ
しく出さるこれ由帰らん日を過し更ハ一人由
帰らば再度人を出しとて容子をさけハ伏見を
る地藏ガ化人を取る旅の者とし見るとさハ若
さ女小姿をかへ袖をひかへく枕をかまらぬ
ほどある旅人小生かへると少あれハ此ごろ世
上小とりつこへ化地藏とぞ沙汰する怪事こと
のかざりあり山崎小ハ浅野蜂須賀黒田木村の
老臣とも筑前守の前ハ出四人の使節の一條とぞ
一應の街評定もあく神速ハ御承知りりハ如何

ある御思慮のゆひにやらん憚多きとあかり我等
ジ心ハ合點せりれず因り伺ひ奉ると言葉ひと
くやれハ筑前守ハ眼もあやふらりりハさ
もさくも人の智慧の海の浅さ深さ目と計りかこ
さりのをなかりりり面々も弓矢とり相應ハせハ
ハ勝れあへり然るハ左サリのとを言ハるハ何
とぞやと云れハ小より浅野黒田の二人者むハ
つふふ思案ハるハ莞尔と笑ふハ如何ハ左様
の浅々者ハ御事ハハ飲といさハり得心せハ体ハ
りハハ筑前守何とハさぞ浅々ハハと問ハる
小より浅野弥兵衛障子をひらハ今年ハ暖ハハ

執あるとも我犬千代の昔より能これを知る筑前
守の大切りり然も人望小加あひて嫉むりよ
り清洲ゆも分外の無礼をあり筑前守を怒り
り喧嘩の上ゆ佐久間玄蕃ゆこれを打殺させん
と計りゆ事ありゆいゆ怒りと嫉みと日頃
小増つるを以て大徳寺ゆ焼香の論ゆ及びゆ
筑前守ハ嚴重小備へを立三法師君の御意と云
これ戒めゆハ加へす詞ゆあかりゆかとも諸
大将列座の中ゆ其罪を擧られゆ何ゆどう腹の
立ゆんされバこそ都の内ゆ聞諍ゆ及ぶゆり
かとも人数少ゆれハせんがゆく鞍馬越ゆ

越前へハ加へりゆあれさ母ど遺恨あり筑前守へ
和平を請ゆと加へすゆ不思議のともあれ定め
思慮ありとありゆと幾度とゆく考ふるゆこれハ
必定北國ハ雪深く十月より二三月まぐり人馬の
往来と申加らず然るゆあり權小和睦を取結ひ
筑前守小油断させその内小軍馬をとゆの打
出ゆさ心あらん是ゆゆの我ゆゆとゆ思ひ得
ゆ小筑前守が容易く承列せゆこそ怪ゆゆ然ハ
筑前守勝家が胸中を悉く知りて勝家が謀ゆ付
まこと別小工夫をこらせゆありゆ筑前守ハ我少年
の時よりよ小親ゆ交りゆ小加りゆゆのゆ

奥州史八編卷十四

七

由心の底小落舟ぬをば如何小説と由請ひま
とあかりありあり夫ハ未と弱年の思慮も分別も定
よりぬ時の事ぞかゝ今ハ中國の探題職多くの敵
お出合く智恵も了簡も日々小新とおみりさつる
うへもや初老お入りつれハ工夫もさぞかゝ熟
練つらん然ハ利家あどく思ひ得るところを筑前
知らぬとふいよもあらし然るを念おく快くの
おくぬあらしこびく勝家へも使お立し我々へも物
多くわくまし心のうちハ如何ゆぞやこれを思ひ
得ふハ我筑前が上お立とあしと志とく頭を傾
けて外さまかうさまと思ひ廻りすハ斯有んと由

思われず又寝の床小夢さめく心地りしさまが思
ひ入りてぞ居たりしハ自然と顔おあらしこれ
利家が近習小性の侍ども奇合くかたりはるハ殿
ハ山崎お旗頭の柴田殿のトさるハ通りふ説と
このへく帰りゆり登りお増と引出りの多く得
めひ又北庄よりハ馬ハ太刀その外種々の贈り物
供お立とる我々まが終おか母どの喜びハ夢お由
見ざりしとあるお殿ハこれを喜びあはず明ても
暮てもおの按ト濟ぬ御顔の色りし何事らうん
とゆふほどお表勤お側遠と侍衆や番頭家の老も
さいてはり然ども如何と問ひよりん縁あるれハ

袖引しうひま黙止しはるが長九郎左衛門尉連龍
かくとさくより出仕し御前へ出れば利家中扇
とり直し連龍に向ひいぬ九郎左衛門尉何事
るや呼ばぬお出仕ハ心りてありと有りし時九郎
左衛門尉おこまり不時の参上さぞお御不審
それハ例あるとおは追々言上仕るべし恐れ
中條ゆいゆい共殿の御顔色常におおもり見えさ
せぬ如何あるとを御案ありんわさし御
漏しハハハ愚ある田舎意見おれもんごりはるお
より利家打よりひ色お出しと人の問まで過し
上京の時母の見せめしうし人の行衛のおぼつり

あく思ひくらし心の底をあ恥しやと宣へハ
九郎左衛門尉戀おすはるし人心それ由誰ゆへ
らち山雪ゆい越人道ゆあり難面か思ゆやおぼす
らんよと問ひあぐさえさ年とち春おゆあ
りて木の目峠の道ひらくころを待てとの游女が
心それをもと誰ゆい思ふ雪ハおろ加火の中水
の底戀ゆいつくす習ゆいれとくハ利家莞尔と
笑ひ九郎左衛門尉が心の底よく己が心とあひ
しぞや去ハ打ち語るべし入ゆいや聞ゆれんこち
こよと庭の奥ある小座敷お呼び迎へし音をひそ
り其方も知どく柴田ハ嫉妬ふかくし横紙破る

九段言ノ多ク一四

こころの底誰とくも知らぬのあし夫が木折お
筑前守と和睦のとり我々四人を上せし柴田似
ざる心あり又筑前守ハ何事も思慮深くしかり
その事をさへ再應思按の上ありしハ仮ゆをた
ずしく決著せざりし本性あるハ我等が詞の盡る
ゆもさず柴田殿の左中ういたる、を筑前何と
うやべさと忽お納得りしハ怪しかりずや是を
思ふハ柴田ハ雪四へ和睦し敵の心を油断させ
んず心と考りし筑前守がそれ知らぬとハ何るま
しよハ我等がうふまゝハ請引しハ定めし何り深
き心あるべし然ハ明年雪解し時柴田と筑前と合

五

戦何りんと鏡あかしく明らしその時我柴田と
共おせんり筑前守ハ舟べさし筑前とハ竹馬あり
敵とあらんハ願をかりず柴田ハ北國筋の旗頭
ありこれを捨んハ武士道をわすれいかせしと
案ずるも人すあかり知し其方ハ告しありん九郎
左衛門尉ハ心ハ何とく思ふ計らひしとありけ
るゆより九郎左衛門膝をすくえりしハ實ハ
殿の仰の如く雪深さゆハ和平し筑前守ハ油
断させんと計りしハ但是ハ柴田殿一人の意を
りて夫し龍川左近将監の計策あらん夫を心能
請られし筑前守殿ハ加あらん春正月下旬より二

九段言ノ多ク一四

五

月初ころより小勢州へ出馬ありて然し瀧川
を打ほろぼし夫より清洲岐阜を討平げそのより
小雪とけ路次よりあるありて越前へ切入あふべ
し早春筑前守伊勢尾張を攻られん小柴田殿道ふ
さかりて加勢もあふまじ長北国の押あ及む次第
一の時と知べく其ころハ此方様おても雪深けれ
ハ筑前守殿へも柴田どのへも御加勢とて出陣
あ及びゆより其上小柴田どのハ筑前守殿と弓箭
をとりかりしあふ小江州長濱の近所ありと思ハ
るべしれども筑前守殿決し長濱よりありおて軍
ああふより九郎左衛門尉が心ハ柴田勢の越前

申し愛發りしくハ柳が瀬よりこそよろし軍
場あれハいづれも柴田勢柳が瀬をこし江州へ
入る戦ハ越前勢必勝の地と思し召すべし筑前
守殿柳が瀬をこし越前滅亡と知せあふべ
しこれ待り御出陣ハ共おそかりしと覺ゆと云
へハ利家大お悦び如何ハ瀧川左近が計策ある
べしその上小柴田ハ右大臣殿の御妹とて淺井
へ嫁ゆりしハ市御料人をこの頃迎へ取りひ
しとあり是ハ定めし神戸殿と瀧川が嫌なりゆと
思ふありと云ハ九郎左衛門尉左中ゆべし勝家ハ
神戸殿をりり立し織田殿の御跡とて自身ハ宿老

あり叔母婿ありと云く氣隨をあんず心の三筑
前守殿ハ織田殿の御跡残る所なく取賄ひあひつ
れ共真實の御心のこれより自身日本の大將とあ
りんとおぼつるあやや少將の任せられ禁
裏の御覺へハ中將のすゝみ大將の上
りぬもんを今二三年の月どあるべし三法師との
生長ゆこちハ大臣のありぬもんが其心中のと
くまゝと此並々の人々の及ぶ所ハありと
ハにるゆより又左衛門尉のありと秘すべ
しと相談し是よりて又左衛門尉深く筑前守
の心を寄くりり

祖父物語ハ市御料淺井より歸り母と一所ハ
岐阜の居あふ天下第一の美人あり羽柴筑前守
深く心あけられれ共夫の敵とくうにひま
あそねを三七殿と心をあせせ柴田これを迎へ
とる筑前守深く憤り柴田を越前へ返さるとい
それハ丹羽と池田とこれを和しとりとあり
北國全太平記ハ天正十一年四月廿二日羽柴筑
前守秀吉直ハ越前の府中ハ押来り前田又左衛
門尉ハ對面ハ早速和睦ハあひ四海静謐の功偏
ハ利家を頼入由を宣ひそれより北庄ハ押詰く
城を十重廿重ハ取圍よる云々とあり

長九郎左衛門尉由緒の事
并長谷部信連牢を破る事

長九郎左衛門尉連龍が由緒を尋ねる小能登の畠
山の家臣八人の随一と呼れし對馬守連繼の二男
あり去天正五年畠山の家臣温井備中守景隆その
弟三宅備後守長盛逆意を企て對馬守及びその子
九郎左衛門重連を討ゆる由し國郡を押領してけ
りあかす小連繼の二男幸思寺と云寺の弟子と
て有るるが父兄の讐を報せんとも還俗し九郎
左衛門連龍と名乗りありをりり連龍信長公の
請く天正八年越中の森山より能登の福水小打

て出八伏山菱脇佛性寺小竹東番場の數城を陥れ
武威を國中お振ひゆるが柴田勝家加州退治のと
り發向しゆるゆより柴田小加勢し一揆共を打
ゆるゆし終小温井三宅と合戦しその地を攻め
とりしか信長公より前田又左衛門尉利家を能
州の守護とあり國政を取行ハせゆるゆより利
家の家人とありしあり其先祖を尋ねれば長馬
新大夫為連が子左兵衛尉長谷部信連が後とかや
信連高倉の宮小當参しし時々伺公しゆるが治承
四年五月十五日宮三井寺へ落させあひゆる跡へ
檢非違使とも寄せ来りしと宮ハ御出ありし由

を中比るふさあいのをせそたぐ探し奉れと云て込
入り礼妨しるるを信連と、おろり偽ハ云トと云
る押し返へしるるを其うちとれと下知わつれ官
人ども切く入るを信連一人おろ防ぎ戦ひ終り生
ごられ六波羅お引れ一かハ飛彈左衛門尉景家お
らづけられ左の獄お入られとり

源平盛衰記を考ふるゆ五月十四日の夜の明
の檢非違使源太夫兼綱出羽判官光長博士判官
兼成高倉宮の御所お向と有兼綱ハ三位頼政二
男あり光長ハ美濃源氏土岐の一流あり博士判
官とハ明經博士おろ檢非違使の判官とるを云

ありこの三人足輕放免おと大勢名つれ宮の御
所お参入し所兼綱ハ宮へお参上し御前へお出
し人おへおとと速慮し内へ入らず光長兼成
ハ内へ入宮お御出有べき由を中つれハ信連立
出御留守のおしを中おより下臆さお走り入て
さおしとくおつるお兼成が下部金武といふ放
免打及を抜く向ひ合ふと云へり放免ハ職負令
物部丁といひしりのあく打刀ハ即帯伏るる由
のありこの金武打刀あくハ加あをすところ小長
刀を以て立むかひ終り信連を生捕りあり流布
本お國見藤次大上彦内るとりふりのられと

これハ偽アリ信連の名捕られハ五月十五日
の戌刻よりその夜宮ハ三井寺へ入りありハ十
小頼政入道の三井寺へ入りハ十九日宇治合
戦ハ廿六日卯刻この日宮ハ宇治より今道二里
半餘のひろひ光明山鳥居前より薨せらるると東
鑑ハ云りこれより八月十七日ハ山本夜打平氏
の一族兼隆を誅せられ廿三日夜寅刻ハ石橋山
の合戦十月廿日ハ惟盛富士川の西の岸あり
上り十一月二日ハ歸京せられ十二月二日藏人
頭重衡東國の追討使と下向せし由路次よ
り歸京せられ翌年閏二月四日太政入道薨御そ

れより中一年を過し壽永二年ハ平家都落あり
信連左京の獄ありて傳へ聞ハ宮ハ流矢ハ中り
たあひ光明山の鳥居の本より御命終らせあひ源
三位入道ハ宇治より自殺し郎等大々と戦死しつ
るよりあり然らんハ於てハ誰ハ宮の御跡を訪
ひ宮の御子達の御後見をいあすべさハ加ありて
この獄を逃し出べさと種々ハ工夫しはるところハ
囚獄の放免と申の語を聞き信連ハ近きうりハ
切らるべさ定めハ入りてヤハ哀れと云ひハ
涙かたけハあり又ハヒトたりヤ内大臣殿をりて
のあり奉りたる曲者より相當ハこそありやと

いふ由り又老さるかいや左サリハ云とあかれ
 総くハ信連ダ道理ありと飛彈の左衛門どのハ云
 れしあり今朝由左衛門殿が主の家ハか入りと
 るりのありんとさ誰ハ防うべさ是を防が
 んとせば手疵かたせ又ハ打中殺しつべしそれハ
 僻言といふ主人や有べき我々由者振舞ふべく
 ハかりへども左サリハあるべさや如何ありんと
 つふサトよく歸られとり然れば死罪ハあるおど
 きくと云信連心のうちハ思ふサリ六波羅ハ大
 臣殿のありハ無礼せられしを咎められハ宗盛
 さぞ腹立つらん腹立つればこそ加サリハ獄屋ハ

入れさるあり然れば宗盛への追役ハ我を切ん
 と云りの多加るべし此放免どもさへ多くハ切
 へしとつふありありれとり切られく詮方あり
 然ハ放免どもささバかりと見むやと思ひつさ夜
 明ければ一人の放免をよびとゞめ信連由遠から
 ず切れんと思ひ定めハ夫ハ付て面々へ頼入ハ
 有り聞てとゞとつへハ何事ぞと云とりの信連
 若とささより清水の觀音を信づ日どハ参詣し
 つさふ此十餘日かゝる身ハありさゆへハ怠り
 け因て熱湯を以て身を浴し最後の祈念せんと思
 ふあり熱湯を一桶給めくそのよろこびハ信連

宿所小貯へとる鳥目五十貫をかりハハべと面
々へ参らせりせんと云放免と聞音と音と人
由や聞んまつ其賜をべと状かさく給りへ其上
めく免もかくも計ひやべと云信連とや方便課
せくゆりと心小笑を含み其状かハんと家安くハ
但信連が身小禁獄せられとらまづ信連が願を
かあへとのち状をかくとも遅かりトと云放免共
はふくと云ひく熱湯をりり来り信連手をさへ入
て試み猶ぬると云ふより又沸くくりり来り
お母ぬると云ひく三四度及ハ放免と由
此方小釜をりり運び獄の前ふく煮沸湯玉の跳

るところを汲みくいと浴へと云信連はあ嬉
この悦びあり五十貫も百貫もあかりトいで状
かさく参らせんと云ひつ、放免と由小硯筆紙請
あく信連年ごろ貯をくと驚眼五十八貫常の所
の床の下かあるべし此使小付く給りへと書て判
を書き上所ハ長谷部右兵衛殿留主処とぞ書とり
り放免と由大小悦び始ハ五十貫とつひが今
八貫餘計ありと跳りちがうく喜びく右兵衛どの
心のゆくまゝ水湯ひさめへさうとさく餘り熱
水ゆと云く水桶をもち荷ひ来とらうと信連湯
を取くちぶるよと見へし左ハるくて並び居と

大岡記 編卷十四

七

る放免さつめんとよりへさつといふけりけりバ煮かとどり湯ゆ
ゆきを何なにり何なにといひひく倒たふれ伏ふし何なにつや
堪たみこやといひひさよ五ご七しち人にんハ焼やとどれ苦くめり
信しん連れんこれを見みる何なに誤ごり何なにりといひつ立た上じやう
りさよ湯ゆ桶かのそしを踏ふぐ獄ご屋やの屋や根ねへ飛とり
それより堀ほりを越こへ何なに處ところともなく逃に失せと獄ご屋やの
庭にわハ放免さつめんとも六ろく七しち人にん焼やたり加かされ苦くめり
居いるを外ほかの放免さつめんともササ後ごれ見みつけとさ
傍かたわらハ信しん連れんが状じやう何なにり彼あ五ご八はち貫くわんを請こり何なに行ゆく状じやう
あれハ放免さつめんとも又また怒いか心こころ起おり何なにれこれと評ひやう定じやうと
暇ひまとるうちハ信しん連れんいよく遠とほく落おち清きよ水みづ坂さかを上のぼり

大問記八編卷十四

三

ある谷やまを越こへ勸すす修しゆ寺てら何なにり小こ野の大だい宅たく何なにり
い何なにろ氣き疲つかれ腹はら飢うく歩あ行ゆ自じ由ゆうあらば志しば路ち傍かたわら
何なにイ息いきつぎらるが信しん連れん思おもふササあくむあり疲つか
れハ何なに方かたへり行ゆべ志しば身みをササあひその
のちあけを隠かくすべとちり何なに付つり何なにれ立た入いる
藪くさのりサハ草くさあける家い何なに者ものハ何なにれ立た入いる
食く事じを乞こふへと其その家いハ何なにりつと案内あんないをこひ
つ、何なにりを見みまをセバ竹たけ垣かき四よ方かたハ結むすひま
草くさぶきの小こ屋や三さんつ四よつ立たちり薪き多おほくつみりサ
とりこれ何なに者ものの家いハ何なにりヤ

大問記八編卷十四

三

太閤記八編卷之十五

重修真書太閤記八編卷之十四終

重修真書太閤記八編卷之十五

御坊浦右衛門由緒之事

并長九郎左衛門尉家枕食の祝儀の事

長右兵衛尉長谷部信連ハ放免どもを方便り獄屋
きのかれ出清水坂より泥濘谷を越へ勸修寺よ加
り小野大宅よ至りりるよ飢つうれ氣力衰へ
かばりくくハ何方へ落行べさ兎も角も腹
を申しあひ力を増し然し後よ又すべりりり
と工夫しりりりを見れば民の草ふれる家あり是
究竟とその家よとどり舟案内をこひりるよ主と

太閤記八編卷之十五

かほくさ男立出信連が鬘みぞれ髻とけく最憔悴
さる体いりさま事逢ひ人とかほく見えけ
るよより深くちやみなる顔色を見く信連け
るらこれハ北国の者あるが宇治川の戦場い
逢て持さるりのを亂妨され爰やうこと迷ひ
りりさ脚氣の病さり發りまとは難澀今曉ハ殊
は飢疲れ一歩も進みりきりさともせめく故郷
へ一足も近くありく死なまると思ひ是処までも
来りつるが今ハもや實は勞れとり願しくハ一飯
の御恩もあづかりと云主つくりとこれを聞
又信連が顔を打まりり何さま悪き事すべきとろ

とも見えざさバ疲れおつられし体たれありさ
れども今ハりさふべさ飯ありといふ信連りり
を見るよ棚は高く盛さる飯一臺りり主はむらひ
りれハいりいと云主りれハ日ろと与ふべきりの
あぐぐと答ふ信連神しそあへしあらバ下しを給
仏よ供せしあしバ施しあへしつふ主いふ神は備
へしよも非ず仏は供せしよもりりずりれハ死中
さる人よ奠へし枕の飯ありと云信連さてハ我を
も死しさる人を見あひる其枕の飯とべといひく
是を取食ふ主のいとく我ハ御坊の浦右衛門と云
て死人を焼を職とするりのありその飯ハさのふ

大洞也八編集社五

三

焼つる人小そあへりあれども人け是を食もせ
それやへささし与へどと云ひありといへハ信
連飯は何のへどぐり有らん至尊の御膳も此米
攝政閑白の御飯も我々ぐり飯も同ト米あがり
食ふ人より米の品までをる所いれある世
の態うあさいひつゝ食ひ終れば主の妻飯を炊き
そく如法に仕立く信連に進む信連いとく喜こひ
實は御恩あけ脚氣も愈へ氣力も健小成たり斯て
ハ我故郷へ帰り著んといと申す辱あしくとく
立出それより大津に至り志賀辛崎苗鹿堅田和迹
小松を過ぎ若狭国小入越前国をこへく能登国小

下り著者バ一世を忍び居りし小本曾義仲北國を
うち後へ都へ切上りあふとと馳加をり所々小
て高名にれバ本曾もこれを重く用ひあり本
曾ハ山門小取上り都を眼下小見く手とけきあせ
ハ信連ハ山村小向ふこの時彼御坊の恩をおりひ
出信連今ハ一方の攻口をうけぬハ二千餘騎
の大將とありし由かの枕飯あけ疲れを養ひ故
ぞか然バその恩の報せくをりるべかりずと云
て浦右衛門を尋る小昔の家ありしかバ信連立
入いか小御坊どの過しころの喜び申さんとも路
小疲れし飢人ダ参りくゆといへど御坊より仰き

能々見ればまかふべくもあらず御坊さ由を消しげ
ぬも其人あらずかきり誰人ゆえ在すやうんと
思ひし昔ハ一飯小飢い乞食人今ハ正しく歴々
の大將軍あり小變り御有さまと見上見かる
不審むとさ信連大なる袋を取主ありとふ主
阿やみあがり開き見れば沙金幾両か入
りありその時主が御主の枕飯行ひあひり立
出られしその跡へ使廳の放免大勢とづみ未とり
かくる者や来りつると云ひく探り求めらる小よ
り能々尋ねハ右兵衛尉信連獄を破りて逃去つと
かや云ひく又外様へ走り行つるふより枕飯食ひ

あひしハ信連主ありりと思ひ知くハ然ハ正
く右兵衛尉殿ぬくまらるべし去ある小只今の
体ハ甲冑し弓箭をとり多く軍兵を率あふ是ハ
世小沙汰する平家を滅さんよ源氏起るとさこ
へその源氏小甘て世小出ぬふとおぼえし何ハ目
出と信連主のかくあざ出世しあふと我等まで
由嬉しやあや御前と云ハ妻も立出共小喜ぶを信
連見く妻あゆりの取せ然御坊し世を渡り人小
いやえられんより我小役く武士小あれやとい
へハ浦右衛門大悦び直ぬ信連小役く京の軍小
高名しりり木曾信連が軍功を賞し能登國あり所

領を充行ひ一々バ御坊由これハ後々家の老とありつれ共そのまゝハ御坊浦右衛門と各乗あり源平盛衰記ハ平家滅亡の後京都ハ安堵せざしと伯耆の國へ落下り金持の邊ハ經理しるを鎌倉殿さしめひ當國の守護ハ仰せ去文治二年のころ關東へ召下されで剛の者の胤継せんとして由利の小藤太ハ後家ハ合せ召仕せられり御恩の初ハ鎌倉殿御自筆ハかゝの御下文あくのこの國大屋の庄と珠洲の庄と号すかの所を賜りとりとり珠洲の庄とハ鹿登國珠洲の郡あり

時移り代りたり能登國ハ畠山尾張守國清ハ分國とあるふより信連ハ後ハ自然と畠山ハ家臣の如くあり長某とハ目久ハ住られ百姓よく歸伏しつれハ結句守護の畠山より長をりつくりとあり信連ハ八代の孫ハ長安藝守國連とありハ今の九郎左衛門連龍の祖あり安藝守の子即對馬守ありそのころ能登七尾の城主ハ畠山修理大夫義隆とハ義隆年日く酒色ハ溺れ國政正しりりず伯父の弥五郎義春と共ハ上杉不識菴謙信ハ從ひりち畠山の家老游佐彈正忠温井備中守畠山主計頭三人謀叛を企て上杉を叛き

織田家ハ降りたるガ長對馬守をいぶせきりのの
かりひ合戦ハ及び對馬守ハ討れ一ありそののち
今の九郎左衛門連龍織田殿の幕下ゆてせ加し
も前田又左衛門尉の組とさされしあり然るゆ
義隆病死し一畠山の家終ハ乱れ三人のりのども
七尾の城ありく國中を政ごちりるを弥五郎義
春無念ハ思ひ上杉景勝の加勢を合せ一萬三千の
人數を以て七尾の城へ取かけ攻一かハ城ハ落て
三人のりのも討れり此時前田又左衛門尉父子
佐々内藏助金森五郎八一万餘の兵を率一加勢の
と加賀国能美郡御幸塚まで到着せし所七尾落

城の由をさいづれハ是非ハ及むず引かへけ
る時九郎左衛門ハ七尾落城一三人のりの
討死し一ゆへと由上杉の人数ハ城責ハ疲れ勝軍
小月こり油断し一ゆべ一早く押寄く短兵急ハ責
立ハハ城を取返一可ハ案の内ハゆてヤセ
共佐々金森いづれハ上杉勢ハ一萬三千然ハ
勝軍一ハ氣強一味方ハ一萬とハ一ハ路ハ疲れハ
御幸塚より七尾まで二十餘里をせし必定勝
んと又かし一といひく何れハ引返一ゆるを九郎
左衛門さへごりて利家をす一前田一手の勢を
以て七尾ハ押よせ一時責ハこれ責落す是偏ハ

九郎左衛門尉が武功ありとく利家も何つく

七

九郎左衛門尉が武功ありとく利家も何つく
 これを用ひぬれば長が家ふとくび榮へる
 不依くハかの御坊浦右衛門が子孫も重く取立り
 長が家老とあり年始ふハ御坊が家より枕飯を
 主の九郎左衛門尉に進むるを嘉例ととりとあん
 大谷慶松長濱へ使節の事
 并神谷木下伊賀守を諫むる事
 羽柴筑前守ハ柴田が和平の使を得てより又
 奇計を案じ出ぬぬればハいかみとりふ
 北國の道筋ありハ長濱を取返さんとめぬとく大
 谷慶松を召出し宜ひとるハ其方かこく木下半左

衛門こハ無二の懇意あり半左衛門ハ長濱の柴田
 伊賀守が家老たるのそあらハ内縁の叔父とさく
 されハ半左衛門が得心せば伊賀守ハそれハ従ふ
 べし伊賀守武勇ハ人ハ勝れ若者ありれども思慮
 浅く汝長濱小のさく半左衛門尉ハかく云とぞ
 下知ハぬハ間ハ馴れと大谷慶松承りぬと答
 即時ぬ用意ハ長濱小まりまづ徳永石見守が
 家小案内す石見守元より慶松とハ懇志を通し
 談ふ間あり折節徳永が家小柴田が與力大鐘藤八
 疋田左近由来會せり此二人慶松とハ竹馬の友あ
 り不思議の面會を悦びその夜ハ夜と共ハ談りハ

大朝臣八編卷十五

七

りり徳永大谷のりり様敵とあり味方とあるこの
ころの有様あり今日り如斯親トみ加とらへども
明日ハいか成行べさう定めあささり武士の身
のうへありさりバ今宵ハ實不得かささ圓居あり
一献酌んと云つゝ家の老を呼び出大谷どの
来りのふぬ鮎を煮て酒を進めやと思ふあり共
用意せよと云へバ畏りぬと答て立おりりさて徳
永いひりりハ柴田修理殿より使者を以て和平の
義を筑前守殿へ入れりいひり筑前守殿御得
心のより使者の衆よりうにぬきり四聴ふ達せ
筑前どの修理どの、心中を知らせぬことを

よもりりト知く和平の義を請けあひりかへつゝ
深きころの有りあるべり其深き心とらふハ此
ころの雪の深さを便とらまづ此長濱を攻取ん
とありぬふありん然る時ハ尺今由いひり敵とあ
り味方とあるとハ此とよ其時とありハ如此うち
とけかごりせん暇もあらず然バ今宵の酒盛ハ
實ハ千秋の一會とらふべりと云その時慶松いひ
りさハ如何お由御邊の御心付の通り筑前守の和
平を承知つるハ必定深き心のありんと我
々も心付つて長濱攻めハよもあらずまづ考が
へく御覽ゆへ長濱へ軍兵をさし向ゆハ修理殿

大問記八編卷十五

ハ雪深き故小出張あるもどくへと由瀧川を
よび三七殿よそ見てハ居ぬまゝ三七殿と瀧
川と一つありて援ひ来りハド筑前いかハ猛
くハ共長濱を由取得ごとのとありハ柴田どのと
敵とあり忽ちハ三方のぬとさを設くべし筑前次
し左サリと思願あふ軍をあすべかりと云ハ
より石見守然ハ何田ハ和平を請しありめと
思案するを見く慶松又申すサリ今宵ハ乱世を
すれての一会ありササリのとを云べとありハ
只うちとけ思ひくぬたのしみとありと云ハ大鐘
足田も一向ハ然るべしそれハ解くハ半左衛門を

も呼ぶべきありと云石見守實ハ志ありくと云
く木下をよびむかへと半左衛門使と共ハ出来
り慶松を見く一別以来の疎遠をかりよと餘念
あく酒坏とり加ハ一數由加さるハさまぐ思ひ
そのべく世ハむつありと語りける此事いかり
る伊賀守の耳ハ入りり伊賀守ハ所勞と病
抹ハりりハ筑前守とハりとあり親ハ交りり
大谷慶松を由見知りとれハ何それ病ハ侵されも
の六くハよよその有さまを聞たらんハ少
一病の急とるたよりハやありんその大谷よべと
いそれハ使徳永ハ家ハ来り伊賀守のいそれ

大問記八編卷十五

七

一サリを告ぐる小より大谷も老ぶく小伊賀守殿
へまうり出んとまうりバその用意もすべかりル
ガふと舊交を思ひ出しくこゝまうり参向志つるお
れハありあり無礼く老くるとりふを以て使とあ
かへりそのよしを申さる小伊賀守いや左あり
ずこの方も病中あり内々あり對面たはをりんと
いふあり慶松一人使と共小伊賀守が病牀おい
とり何くれと世の有さまをかたり時を移しく退
出し又石見守半左衛門と額をさし寄くとの語り
し日暮しにるる伊賀守も慶松はあし力
を申しいさゝら心地よくお月へしるるバふくくび

よびむかへく物がたり一夜をふかあどしにる
月と小北庄より付置し横目ども大不審しいそ
ぎ雪中を去のど越前へ立ちへ北庄のしり修理
おかくと告れバ元より思慮淺き勝家ありこれハ
伊賀守と筑前守と密々の語らふとかりひし加
ハ与力の者の心を引見くそのうち計らふ音ある
べしと夫断し山路將監神谷越中守ハかの参會の
列ありのバこれらと示し合すべしとく近習をひ
そか小長濱おつかり大谷が体をうかへをせけ
る小大谷何とあく逗留一夜お入れバ木下半左衛
門徳永石見守大鐘藤八足田左近とうちよりく

深更までも酒の遊びにる体事からだと見え
つるのえあり夜半をわりの伊賀守の許へ入
只二人さし向ひ占々と談ふハさハあふ餘事あり
すと横目も近習も推量し種々と考ふれハ
さとの多かりはるおありその由すべく落着く
北の庄へ注進しはるおあり山路將監ひそり小神
谷おありとるハ大谷慶松長濱おまり滞留す
お十餘日お及ぶ筑前守の使々と思へハ左おあり
りだこの摠りくぬ世のまら小長々と遊び居る
りのやあるべきい加お不審お思ひハ貴殿ハ左
ハか目さだやとりふ神谷答しりふやう某も兼く

さや小存しつるおあり木下半左衛門小や早
々慶松立返りゆやう計らひしべいとくゆへハ
半左衛門がやういや苦し加らト大谷ハ我りと
内縁り加つ慶松お母の頼みお困くこの濱おて
尺二寸の鮓を得ま思しとく来れるありその鮓さ
小得させお直お加へるべし但尺二寸の鮓ハ此
雪中小得がさしそれゆへ日敷を經ゆありとゆふ
將監おやみ儲ハ半左衛門も慶松と一味と思ハ
れさし神谷おをありく大谷を驚りさむやと思ひ
立まづ神谷が館お行く大谷がとい加お伊賀守
殿のお為おありしからトと存しゆおより半左衛

軍セバかゝりず柴田ハあけとあるべしこれハ
修理殿の組とハいへ主従あけハあしよそ見
とも誰かハ何と云べらんやされ共正しく組
頭の柴田殿の家のはびんとするを不知顔ハ見
べき小ぢらぬ者くれとも修理殿ハとぬくといふ
とをさくべき人小ぢらぬ何卒しく伊賀殿を筑前
守小引舟て修理殿にびあふとも伊賀殿を世小出
しく柴田の家系番を継せむやと思ひゆあり將
監殿ハ何と思ひあふゆやと問ハ將監いさよ筑
前守と修理進殿と程あく合戦ハ及ぶべしその時
我らハ先手小せ加ちり討死すべくぞんどの

それより外ハ思ひ寄れとあけいと答あれハそれ
も去とゆへ共伊賀守殿の此日ごろ厚く見あし
あふを何とく情あくりあしあふべきといへハ將
監我らどき愚人の了見ハ父の修理殿にびあひ
て子の伊賀殿の全かすべき道理を知らずと云ハ神
谷されバそのとを我らハ加あけく思ふあしより大
谷とも中違とと存ありとつふを聞く將監ハ
いよく何ゆく大谷と共小筑前守へ内通するよと
推量し只一人北左へ使を立長濱を立去んとを
えかりけり

